日本看護歴史學會
會報
日本看護歴史学会
第 25 号
1996年10月1日

第十回日本看護歴史學會大会を終えて

平塚朝子

夏も終わりに近い、八月二三日、二四日に、全国各地から皆様をお迎えし、記念すべき第十回日本看護歴史学会大会を、山形で開催できましたことを幸せに思っております。

初めて地方で開催するということもありまして、準備委員会を組織し、山形県、山形市、山形県看護協会から後援を得て、代表幹事をはじめ分科会担当者、研究発表担当者と連絡を密にしながら準備を致しました。

この度の學會大会をふりかえって、感想も含めながら述べて見たいと思います。

今年のメインテーマは「歴史にみる女と男」で、講演Ⅰでは「平安朝の女と男」と題して、女性史研究家の服藤早苗さん、講演Ⅱでは「荻野吟の史料による歴史の研究方法」と題して、代表幹事の亀山美知子さんから講演をいただきました。

講演Ⅰでは、千年前の男と女の関係について、史料に基づき内容も豊富で分かりやすく、楽しく話を聞くことができました。

もともと歴史的にみれば、男と女の共同社会であったものが、男と女の関係が役割分担になって来たのは、平安朝からであること。平安朝の結婚の形態、夫婦別姓であったということを聞くに、夫婦の別姓が論議されている昨今を思うと、時代の違いを感じてしまいます。

歴史は繰り返す、といわれますが、今まさに男女共生社会をめざして、世の中が動いているような感じがするのは私だけでしょうか。

渡辺淳一の「花埋み」を読み、荻野吟が女医を志したきっかけや男性社会のなかで、悪戦苦闘しながら女医になった物語りに、ひたすら感動していた私ですが、講演Ⅱを聞き、物語りとは違った史実が、解き明かされていく過程がとても興味深く、歴史研究とは事実を確認する作業で、新たな発見ができた時の喜びや感動があり、ますます歴史にのめり込みそうな自分を感じます。

また、歴史研究に造詣の深い服藤早苗さんと、亀山美知子さんによる「歴史研究をめぐって」と題して対談が行われました。お二人の経験を通して、歴史研究の神髄にふれたような、満足感を味わうことができたと思っております。

研究発表は例年になく多く六題ありました。それぞれに興味深い演題で、発表者の熱意が伝わってきました。しかしながら、研究内容が豊富であるため、予定の時間を大幅に超過してしまったことは今後の会の運営の検討課題でもあります。

また、研究発表並びに分科会の追加史料、発表形式（スライド、ＯＨＰ、ポスター等）も、会場の準備や経費の都合上、事前に把握する必要を感じております。

分科会については、参加者の研究や興味のある分科会に出席できたことや、今年も講師・助言者の参加があり活発に討論されました。

各分科会からの報告と、金子光さん、服藤早苗さんからの助言は、今後の歴史研究を進める上で、多くの示唆が得られ参考になったのではないでしょうか。

学会大会を終了して、とても残念なことは、一般の参加者が少なかったことです。事前の広報の在り方や、工夫が必要であったことを反省しております。

それでも、出席した人からは、歴史研究の意義や、内容の奥深さ史実の重要性などを、学ぶことができたとか、看護職の大先輩の声をじかに聞き感動した、などの感想を聞くことができました。

地道ではありますが、会員の皆様そして、今回参加いただいたお一人お一人から、口コミでこの学会の「良さ」が伝わり、多くの仲間の参加が得られるようになること、を期待しております。

皆様には遠いところから、みちのく山形までおいでいただき心から感謝申し上げます。山形はいかがでしたでしょうか？

来年の学会で、また皆様とお会いできますことを楽しみにして結びといたします。ありがとうございました。

第一〇回大会報告

代表幹事
亀山　美知子

本会設立一〇周年を記念する大会は、初の地方都市での開催となった。山形県および山形市の助成金を得たこと、遊学館の確保では本会々員平塚朝子氏ほか、同地の保健婦グループ「十五日会」の諸姉の全面的な御援助に対し、心より感謝するとともに、山形県、山形市及び同地の看護協会等、山形大学医学部看護学科教官各位の御協力についても紙上を借りて御礼を申し上げるものである。

さて、今大会では、先にアナウンスした通り、メインテーマを『歴史に見る女と男』として、ゲストには総合女性史研究会の服藤早苗氏に「平安朝にみる女と男」と題して御講演を頂いた。従来は、兎角、近代以降の講演が多い中で、初の中世史（平安後期）について氏の研究成果の一端を聴講することが出来たのは幸いであり、会場からも大変好評であった。

会員総会では、このところ懸案事項となっている会費収入の大幅な落ち込みに対する処置が提出され、意見聴取後、本会予算中の大会費の援助金五万円の支出を停止することで了承された。

次いで、提案事項として幹事会より提出した「特別会員制度（仮称）」の導入について諮ったところ、山本捷子氏他一名の反対意見および、細井志乃婦氏他二名の賛成意見が出されたものの、結果的には「会則の一部の改訂」として、今後幹事会で検討することになった。

尚、「特別会員制度（仮称）」は、対象を基本的には、看護史に関連して、従来より、看護界に多大な貢献された諸先輩の方々を対象とすることで、会員の歴史研究に資するところ大と認める。

また、会報で予告した通り、本会の事業として、来年の「保助看法五〇年」に合わせて『日本看護歴史学会編・戦後五〇年史（仮称）』の刊行の準備のため、特別編集委員会の設置を行なう。すでに会報で提示した九名の諸姉の中から確認を急ぐこととする。その後、執筆の項目を確定した上で、執筆者の選定を行う予定。

前記の件に関して、編集委員会より、会員諸姉に執筆依頼のあった時には御協力をお願いする次第である。尚、編集委員もまた執筆者たり得るとする。

第10回大会収支決算書

（山形県・市）

収入の部　単位：円

科目	決算額	備考
参加費	336,000	会員50人非会員45人学生5人 計100人
大会総会費	50,000	本部からの繰入
補助金	220,000	山形県　100,000 山形市　100,000 山形県看護協会　20,000
雑収入	106	預金利子
合計	606,106	

支出の部　単位：円

科目	決算額	備考
賃金	0	
報償費	120,000	講演料@100,000×1人 分科会助言者謝礼20,000×1人
講師旅費	54,500	服藤25,000円金子23,000円 結城6,500円
講師宿泊費	15,363	服藤4,067円金子11,296円
食糧費	64,989	講師、助言者等食事代 23日昼食17,680円 24日昼食27,810円 懇親会負担19,499円
需要費	215,980	学会資料印刷代　148,000円 看板57,680円　会場花10,300円
役務費	9,174	郵送料
会場使用料	76,100	学会大会75,600円・準備会500円
本部への返還金	50,000	
合計	606,106	

荒井幸子

日本看護歴史学会第10回大会収支決算報告書

＜収入＞　（単位：円）

大会参加費	336,000
会員50名×3,000＝150,000	
非会員45名×40,000＝180,000	
学生3名×2,000＝6,000	
補助金	220,000
山形県　100,000	
山形市　100,000	
山形県看護協会　20,000	
懇親会参加費（3,000×53名）	159,000
預金利子	106
合計	715,106

＜支出＞　（単位：円）

講師・分科会助言者謝礼（2名）	120,000
講師・分科会助言者旅費（3名）	54,500
講師・分科会助言者宿泊費（2名）	15,363
講師・幹事・世話人食事代	45,490
会場使用料	76,100
資料印刷代	148,000
看板・会場花代	67,980
懇親会	178,499
通信・郵送代	9,174
合計	715,106

＜差し引き残高＞　（単位：円）

0円

＜累計残高＞　（単位：円）

前年度までの繰り越し金	692,832
本年度残高	0
累計残高	692,832

（次年度に繰り越し）

（会計　大平政子、依田和美）

分科会報告

担当者　五十嵐　節
　　高田　節

分科会は第二日目の二四日午後一時から一五時まで七分科会に別れて開催した。話題提供者は北は秋田、南は沖縄に至る方々であった。特に今回は、前回に続いて金子光先生が、また第一日目から特別講演講師に来てくださっている服藤早苗先生のご参加があり、第一〇回の日本看護歴史学会大会の節目に相応しく大きな花を添えて頂いた。

報告会は話題提供者別になって約四五分間、報告・質疑応答・意見交換を行い、十分間の休憩の後、一堂に集まって、各分科会の概略を五分間で報告しあった内容を一五〇字程度にまとめると次のようである。＊話題提供者（敬称略）

一、「詩人三木露風の母　碧川かたの生涯」＊山崎雅代

三木露風の生母碧川たかが、どのような生き方をした人かを山崎の書いた小文をもとに紹介し、三木露風の『母を恋うる歌』と『赤とんぼのうた』をとりあげ、かたが露風の文学の中にどう生きているかなどを語り合った。史料は『女権』のコピーや写真類、童謡集『小鳥の友』『小学生の歌』の初版本、かたの請願書など二五種類提示。このテーマを今後も続けることを確認した。

二、「府県別看護婦規則等の制定状況と制定内容について」＊滝内隆子他

看護婦の法的整備は、産婆より遅く明治三三年に至ってようやく東京府が「看護婦規則」を制定し、以後二八府県が、大正四年の看護婦規則までに制定している。そして制定内容として看護婦の定義、年齢、性別、服装、業務、免許、試験に関する事が規定されていたことが明らかになったので報告した。

三、「光明皇后の母橘三千代と薬師信仰―その二」＊檜原登志子

橘三千代の薬師信仰の歴史的位置付けをその一に続き報告。今回は三千代の人物像をピックアップすることの重要性を、歴史的史料の歴史学、文学、民族学、考古学から検討した。史料を研究目的にそって、しぼる事の意見があった。今後も現地に立ち、その場で史料を感じられる感性を大切にして、フィールドワークを大切に発展させる。

四、「京都府内の初期の保健婦諸姉の足跡を尋ねて」＊福本恵

保健婦第一号とはどのような人を言うのか、法的な位置付けや正式な職名と身分のあることとするのか、又は、保健婦業務の基礎となる仕事をした草わけ的な人とするのか、さらに教育を受けたかどうかを問うのかなど、第一号の定義について討議した。女医第一号の荻野吟女史の例を参考にしつつ、保健婦の特徴をふまえ、実態をありのまま、捉えて初期の保健婦群像を明らかにしていこうと思う。

五、「占領期における看護教育・制度に関する考察」＊杉田聡他

六万点もあるGHQ／PHW文書の中から、看護課関係文書が翻訳され、一九四六年当時の看護課の活動が明らかにされた。同席された金子光氏の証言も聞きながら、戦後の看護改革の経緯、GHQナースの考え方、わが国の看護の様子などが把握でき、実践された改革、陽の目をみなかった保健師法案などが今後この史料によって正しく検証されるだろう。文責　山本捷子

六、保健所における地域精神保健活動―沖縄県の保健婦活動を中心として＊當山富士子

保健所における精神衛生活動は、本土の場合法的には昭和四〇年の精神衛生法の一部改正によりスタート。沖縄においては、復帰前、専門医の極端な不足のため日本政府より派遣された医師等が、昭和三九年より医療機関の乏しい地域で保健所を拠点に精神衛生クリニックを開設。そこに保健婦が参加し組織的な活動がスタートした。

七、「太平洋戦争当時陸軍病院に設置された看護婦生徒教育隊の実際」＊岸本多恵子

看護婦生徒教育隊の終戦後の状況についての報告があった。生徒たちは無事に終戦を迎え、病院の整理整頓、外地からの傷病者の出身地別の振り分けや搬送などを行った。病院船にも乗務するようになり南方や中国へ一から三往復した。危険な仕事であるが、進んで乗務した。これは戦争中の教育が影響したためである。文責　森祐子

次回、大会の話題提供者の募集は六・七月頃になる予定です。

第十回日本看護歴史学会に参加して思うこと

松尾光恵

生まれてはじめて東北の地に足を踏み入れた。

今回一〇年目の節目の年に、訪問看護の先進県である山形で日本歴史学会が開催されたのは意義深い。

一日目は「平安朝の女と男」と題した女性史研究家の服藤早苗氏と「荻野吟の史料による歴史研究の方法」と題した亀山美知子氏の講演があった。

服藤氏は古典文学を通して、平安時代の家長制度や一夫一婦制が確立されていく過程を語られた。この講演を聞き、古典文学の中における看護を歴史的に分析することで看護を別の視点でとらえられるというヒントを得ることが出来た。

亀山氏は日本の女医第一号の荻野吟を研究する過程の中で、吟に関した本が男性によって真実を曲げて書かれているのに疑問をいだき、それを批評していくところに研究の手がかりがあると語られた。

これを聞き、常に新しい視点で多方面から歴史を見ていく必要があることを痛感した。

二日目、研究発表は六題あり、日頃の地道な研究の成果を興味深く聞いた。しかし、発表時間の延長が多いのに疑問を感じた。発表形式を示説にしたり、発表時間を考慮する必要があると思う。

私は歴史好きな仲間が年齢・役職を越えて「さん」付けで呼びあうこのこじんまりとした学会の雰囲気が好きで、参加するのを楽しみにしている。又、看護界の生き辞引ともいえる金子・大森両先生から歴史の生の声を聞けるのもこの会ならではだと思う。

欲をいえば、若い人がもっと参加出来るような魅力ある学会へと発展することを期待する。

「温故知新」

古きをたずねて新しきを知る

歴史をたどることで、その中から学びを得て、それが二一世紀にむけての方向づけになれば、さらに歴史を学ぶ意味も深まると思う。

学会に参加して

森律子

看護歴史は、看護学校時代に作成した看護史年表で表面だけの学習しか行っていなかった。その後「看護」の雑誌に連載されていた亀山先生の文章で学んだ位である。

昨年、戦後五〇年にあたり、自分が看護職として今日あるのも、先輩方の努力のおかげであり、その時期の状況やご苦労された事など聞くことも看護婦として勤務する上に必要なことではないか、と考え参加させていただいた。従って今回が二回目の参加である。

女性史研究家の服藤先生や亀山先生の話から、歴史を学ぶ時、古文書を読む、繰り返し足跡をたどる、その時代の事実を取り出す為には、何度でもそこに足を運んで見つけ出すことと言われたが、事実を明らかにすること、これは看護する上でも重要かつ、必要なことであると再認識したものである。

研究発表に於いて、一人の持ち時間が決められていたのだが、半ばあたりから持ち時間が延び、最後には大幅な時間延長となってしまった。座長がベルを鳴らす等の方法をとられなかったのは何故か、と疑問に思ったりもしたが、研究したことで特に言っておきたい事や、研究の要点を持ち時間内にいかにまとめて発表するかについて学ぶ機会になった。

その他、史料として提示する時は、文献を明記すること、人名は正確に読むこと、研究のポイントは何か、焦点をしぼって研究を深めること等々を再確認、再認識した大会であった。

以上が今回参加させていただいた中で学んだことである。

昨年、次は山形で開催と聞いた時から、是非次回も参加しようと決めていた。分科会の次回の展開を期待した訳である。

今回は別の分科会に参加したが、次回の展開に期待し、同時に皆様にお目にかかれる日を楽しみにしている今日である。

保健婦の草分け

金子先生、結城ヱク氏

初めての参加で思ったこと

安藤恵子
（非会員）

看護学校を卒業して二十二年。精神科看護に埋没し、この土地の風土につかり、平凡な日々がすぎていた。

第一〇回日本看護歴史学会がどうしてこの山形の地で開催されたのかは良く知らないが、この地で開かれたことで、この学会に参加することが出来た。

この学会の存在すらも知らなかった私には、すべてが驚きであった。

『歴史にみる女と男』のテーマで服藤早苗先生は女性史の立場から男女の不平等な性愛の成立は平安時代からであることを、多くの史料を示し話された。

大学でいつも史料として使用しているという『新猿楽記』は、一緒に読み進める形式で、参加者に笑いを提供しながらも、女と男の不平等に迫っていった。

とにかく興味深く、まったく聞いたことのない視点からの話に酔ってしまった。

つづいて行なわれた亀山美知子先生の『荻野吟の史料による歴史研究の方法』では、さらにど肝を抜かれた。

講演が終るやいなや、渡辺淳一の『花埋み』を読もうと、階下の県立図書館に走り出していた。

しかし『花埋み』だけが無く、私と同じおもいの人が先に借りてしまったのだろうか。その後、文庫本を買い求めて読みふけった。

荻野吟の女医になると決心した時代や吟の屈辱が伝わってきた。

そして読み終る頃には吟の生き方に感動していた。

そこで思う。

私は何の疑問も持たないで読み進めてしまう小説の中に、どうすれば疑問をみつけることが出来るのかを。

亀山先生のものをきわめる目に驚くばかりである。何が正しいかを歴史を紐といて調べるには漠大なエネルギーを必要とするだろう。

俵瀬に何回も足を運んだと語る先生の目の輝きに、歴史を研究する人の情熱を確認した。

私にとってこの歴史学会は畏敬の存在となった。

今後の学会の歩みに注目してゆきたいと思う。

第十回日本看護歴史学会に参加して

狩谷明美

一九九六年八月二十三・二十四日の両日、本学会第十回大会が、山形市遊学館において開催された。

山形県には、行基作の小松沢観音、山形済生館等の史跡や保健婦教育草創期の史料の宝庫であるため興味深く参加した。

大会を貫くテーマは「歴史にみる男と女」であり、基調講演では一、「平安朝の女と男」と題し、女性史研究家・服藤早苗氏が家父長制の成立と婿取婚及び家族制度について述べられた。ここでは、不平等な性愛の成立過程や近代日本の性意識形成が、史料をもとに経済的・政治的背景と照応させながら明解に口演された。民法改正と夫婦別姓が論議されている現在、意義深いものであった。二、「荻野吟の史料による歴史研究の方法」は看護歴史研究家・亀山美知子氏が、近代日本における女医第一号荻野吟の足跡をたどりながら、明治期女子職業教育の端緒を明らかにしていく過程を述べられた。ここでは、膨大な史料を収集する労苦と、先人の研究成果と異なる時の分析について、研究者の問題意識が重要であるとの示唆がなされた。これは、本学会がこと数年看護歴史研究者の育成を最重要課題にしていることからも、基調講演にふさわしいものであった。

さらに、大会二日目は両氏による対談がおこなわれ、緒についたばかりの看護歴史研究の現状について意見交換がなされ、服藤氏から、学際的研究の必要性と研究方法について助言があった。

全体研究発表では平塚氏らによる「山形県の保健婦教育を始めた『保健婦の父』を探求する」他六題の発表があったが、時間的制約もあり、充分な質疑応答がおこなわれないという問題点も残った。

分科会は第七分科会に分かれ、会員それぞれの問題意識を深める目的で論疑した。特に滝内らによる「府県別看護婦規則の制定状況と内容について」、又、杉田らによる「占領期における看護教育・制度に関する考察」は、史料も豊富で今後の継続した研究発表が期待された。大いに触発された二日間であった。

◆会員の異動等について

◎住所変更

87-152　松本香代子→〒156世田谷区経堂二―一―二六―一三一三

94-004　平尾真智子→☎〇四二五―七一―一三〇四

94-015　中林照子→〒100-01東京都大島町元町小清水二七三

87-032　秋山智→〒791-02愛媛県温泉郡重信町大字志津川四五四愛媛大学医学部看護学科

88-030　野島幸子→〒849佐賀市鍋島五丁目一―一佐賀医科大学医学部附属病院

95-003　檜原登志子→〒310水戸市緑町三丁目七―四

87-098　横井郁子（旧姓杉本）→〒113文京区本郷五―三一―一一―一〇三

◎退会

87-018　熊谷雅美（旧姓佐藤）→〒220横浜市西区伊勢町三―一三三―四二六

◎新入会員

96-001　高橋彩　〒248鎌倉市津六一三聖　マリア寮C

96-002　泉キヨ子　〒920金沢市小立野五―一一―八〇金沢大学医学部保健学科

96-003　杉田聡　〒879-55大分市大分郡狭間町医大ケ丘一―一大分医科大学医学部看護学科

96-004　松田ひとみ　札幌市中央区北2条東一丁目ラポール永山公園一二〇二

96-005　細井志乃婦　〒444岡崎市暮戸町赤池五六

96-006　富岡みさを　〒606京都市左京区岩倉村松町一一―一九

96-007　藤田徳子　〒606京都市左京区丸太町川端東入ル東丸太町二二―三

96-008　松崎章子　〒658神戸市東灘区渦森台二―一六―一〇一

96-009　森律子　〒866八千代市永碇町一〇六七―一〇

（順不同　敬称略）

本会学会誌・会報の発売

創刊以来、一〇年月を迎えた本会の『日本看護歴史学会誌』一冊五百円、および『日本看護歴史学会会報』一部二百円をお求めの方は、事務局まで御一報下さい。

看護史一口メモ⑩

私立大日本婦人衛生会趣意書

夫れ人の此世にあるや徒に生活を以て満足する者にあらず然らば高尚の生活を為す事を務めざるべからず高尚の生活とは天賦の能力を開発し智徳を磨き職分を盡し幸福快楽の生涯を為すにあり然れども健康の身體にあらざれハ以て此の生活を為す能はず衛生の法を知らざれハ以て身體の健康を保つ能はず衛生の法豈に一日も忽ゆるがせにす可けんや仰衛生の法たる一にして足らずと雖ども衣食住の改良育児法及看病法等の如きは最も緊要なる者にして皆吾等婦人の掌理する所吾等の責任重しと云ふべし今や矯風会慈善会交際会等相尋で起り吾等婦人社会も漸く其面目を改めんとするは眞に喜ハしき事なれ共衛生の一事に至つては更に注意を惹かざるものゝ如し實に慨かはしき事ども多なり依て今相謀て茲に一社を設け名けて私立大日本婦人衛生会と称し毎月一回集会を開き熟練の学士を聘して先づ衣服の洗浄食物の調理住家の洒掃及看病育児の方法等を講究し尚ほ之を筆記して雑誌を編輯し社員に分ち以て吾等婦人の責任を盡し聊か同胞の為めに盡す所あらんとす江湖の諸愛姉奮って賛成あらんことを切望の至りに堪へず

私立大日本婦人衛生会
副会長　加藤鈴子
幹事　南部隈子　村岡久野子　細川静子　荻野吟子　松浦里子
右撰定　但会長は廿一年三月の総会まで欠員

私立婦人衛生会は明治二〇年九月に荻野吟らによって自主的に設立されたものである。荻野らは大日本私立衛生会（会頭佐野常民）を視野に入れたものと考えられる。設立後、松浦はじめ多くの看護婦たちが入会した。（か）

編集責任者
606-01京都市左京区聖護院川原町53京都大学医療技術短期大学部看護学科　亀山美知子
発行責任者　京都府立医科大学医療技術短期大学部看護学科　岡山寧子・福本恵
事務局
〒602京都市上京区清和院口寺町東入　京都府立医科大学医療技術短期大学部　岡山寧子・福本恵
☎〇七五―二一二―五四四二岡山
☎〇七五―二一二―五四三四福本